

第6回日英シンポジウム Advanced Measurements for Chemistry

日英シンポジウムとは？

日本化学会（The Chemical Society of Japan, CSJ）と英国王立化学会（The Royal Society of Chemistry, RSC）は、両国の交流の一層の促進を図るために日英シンポジウムを開催している。2007年の大阪を皮切りにこれまで日本と英国で大体1年ごとに交互に開催されてきた。本シンポジウムのテーマは毎回異なり、双方の化学会の担当者が議論してその年の特定テーマを決定し、その分野の気鋭の研究者がそれぞれ4、5名参加して活発な交流が行われる。

シンポジウム

第6回目にあたる今回の日英シンポジウムは、第95春季年会（日本大学理工学部 船橋キャンパス）に合わせて開催された。今回のテーマは物理化学の分野から選ぶことになり、Advanced Measurements for Chemistryと銘打って、先進的な計測研究を行っている日英の研究者が集うことになった。

3月27日のシンポジウム当日には、表紙に桜の絵をあしらった“日本の春”を感じさせる講演要旨集が配布された。シンポジウムはRSCのCEOであるRobert Parker氏の挨拶に続いて、RSC側、日本側からそれぞれ4名が40分の



日英シンポジウムの講演者とRSC/CSJ役員・関係者

講演を行った。講演者の名前とそのトピックスを講演順に書くと、Stephen R. Meech（Univ. East Anglia, 超高速分光）、田原太平（理研, 超高速分光）、Karen Faulds（Univ. Strathclyde, 表面増強ラマン分光）、内橋貴之（金沢大, 原子間力顕微鏡）、Jushua B. Edel（Imperial College, 単一分子センシング）、多田博一（大阪大, 単一分子伝導測定）、Jonathan P. Reid（Univ. Bristol, アεροゾル粒子分析）、坂井南美（東大, 天文学）の8名で、2名ずつがペアとなってそれぞれの座長を行いながら、最新の結果についての講演と議論が行われた。講演者とそのトピックスからわかるように、フェムト秒の反応ダイナミクスから始まって、単一分子の物性、生体分子のリアルタイムイメージング、大気化学、天文学にいたるという内容で、時間スケールも空間スケールも極微から極大にいたる幅広い対象に対する計測研究を議論するシンポジウムとなった。講演で報告された先進計測は多岐にわたっており、様々な分野において計測研究が勢力的に進められていることが良くわかった。

シンポジウムの終了後には、

CSJの川島常務理事とRSCのRobert Parker CEOの間で両学会間の協力協定延長に関する調印式が行われ、今後ますます両学会の協力関係を強化していくことが確かめられた。



Speakers Dinner

日英シンポジウムでは、晩に皆で“一杯やる”のが通例になっている。今回は、まずCSJの主催するInternational Chemists' Eveningに参加し、他の国際シンポジウム関係者の方々と交流したのち、船橋のレストランに移動してワインとイタリアン料理を堪能しながら夕食会を行った。この会には中條善樹日本化学会筆頭副会長とRSCのスタッフの方々にも参加していただき、化学のことから日英文化の違いまで夜遅くまで語り合うことができた。国際関係は個人どうしの信頼関係に寄るところが大きい。そのためは（少しアルコールの入った）懇親の場がとても大切だということを再認識する良い機会であった。

〔田原太平（理化学研究所）〕

